

◆幹事より

高橋秀智

幹事（東京工業大学）

「新たな飛躍の第一歩となるような大会にしたい」という大会長の佐藤先生の指示から、講演論文の電子受付、CD-ROM作成、分割式（会場・東京ジョイポリス）の懇親会、cell/66bの特別公演、等々、従来になかった様々な企画の目白押しの大会でしたが、これらは各担当がアイデアを出し合い、検討を重ねそして行動し、非常に苦労されながらも、かつてなかった企画を実現させました。もちろん様々な混乱もありましたが、当初の目的は達成できたと思います。これらの新しい大会の潮流は、様々に変化してゆくと思われませんが、VR学会大会の最もバーチャルな特徴である、単なる記述でなく“体感指向”で、そして講演会での質の高い活発な討論は、脈々と受け継がれてゆくことでしょう。それでは、来年の第8回岐阜大会でお会いしましょう。

◆プログラム担当より

池井寧

プログラム担当（東京都立科学技術大学）

バーチャルリアリティ学会大会は、今回で第7回目を迎え、第1回大会が開かれた東京に再び戻っての開催となった。本年の特別講演には、現在最も元気な会社の1つであるSCE(Sony Computer Entertainment)の久夛良木社長をお招きし、また懇親会は、cell/66b公演、IVRCを併設しながらも、更に日を変えてジョイポリスでも行うなど、誠に充実多彩な内容とすることができた。しかしその一方で、増加した発表数を3並行セッションに収容するため、発表時間をある程度制約しなければならないということになった。並行セッション数を増加して発表時間を延長すれば、聴講できるセッションが減少するが、本年は例年の3室を継承して、発表の密度を高めることをお願いすることとした。発表時間と並行セッション数については、今後、会員の皆様方のご意見をお聞きして、より望ましいものを見出したいと考えている。

本年のプログラムの準備と運営においては、プログラム委員の皆様のほか、幹事の高橋先生、長谷川先生、また東大の広田先生らに大変にお世話になった。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

◆機器展示担当より

望月茂

機器展示担当（株式会社ソリッドレイ研究所）

第7回大会の機器展示は、企業展示16社、実演展示は、技術・作品展示を合わせて、11団体の出展がありました。

大会の実行委員会は、3月末からほぼ毎月1回行われ、それぞれの役割を決め、具体的な活動が始まりました。機器展示は、5月中に案内状の送付先リストを作成し、6月の初めに郵送を始めました。

また、7月に行われたIVRでは、佐藤先生にお願いして、会場の展示企業のブースを訪問し、直接、出展誘致の活動を行いました。

今回の出展の特長としては、初めての出展社が増えたことが挙げられます。

学会の展示だけでなく、VR関係の展示会自体初めてという出展社もあり、新しい業種からのアプローチが確実に増えていると感じました。また、モーション装置の展示など、アミューズメント系に特化した、目的を絞り込んだ製品の展示が多かったのも、今回の特長の一つではないかと思います。

展示会場となった東京都国際交流会館は昨年オープンしたばかりで、建物自体が新しく、会議場やラウンジなども完備され、洗練された感じを受けました。

ただ、本来、機器展示用に設計されているわけではないので、ラウンジを利用した企業展示コーナーの電源の確保が大変で、担当者が事前に何度か会場に集まり、業者を交えて打ち合わせを行って、ようやく工事の目処がたったというようなこともありました。

今回の大会は、IVRCとの同時開催や「cell/66b」の公演、ジョイポリスでの懇親会など、これまでにない企画が盛りだくさんで、それぞれの担当者が連携しながら、大会を運営できたことは、今後の大会開催へのよい事例になったと思います。

展示担当としては、昨年の長崎大会での出展社が少なかったことから、どの程度、出展社を誘致できるか不安もあったのですが、大型展示もあり、会場の有効スペース一杯の規模で展示することができて、正直安堵した次第です。

最後になりましたが、大会長の佐藤先生をはじめ、幹事の高橋先生、総務の長谷川さん、会場担当の清川さん、企画の武田さん、そして私と一緒に展示を担当された磯部さんをはじめ、大会実行委員の皆様にお礼を申し上げます。